

被爆体験を受け継ぐ

川去 裕子

私は広島に生まれ広島に18歳まで住んでいました。父親が被爆者の被爆2世です。通った段原小学校でも、段原中学校でも、広島皆実高校でも夏は原爆や平和についての学習をする時期でした。

父は、1999年に69歳で亡くなりました。生前父親から被爆体験を聞いたことがありません。父は被爆1年後ぐらいから日記をつけることを習慣にしている、当時の父の日記が残っています。また、被爆当時のことをいくつかの文集に残していました。

原爆投下の前日1945年8月5日は日曜日だったそうです。旧制の広島市立中学の生徒だった父は、学徒動員で広島市の西側観音の三菱重工業機械製作所に学徒動員されていました。父の手記によると一緒に働いていた朝鮮からの徴用工の人を家にまねき、ホットケーキのようなものでもてなし、その後映画を見に行ったとのこと。戦争中でも日常生活が行われていた夏の日だったようです。翌年の日記には、「8月に入ったころには土橋の建物疎開の片づけをしていた。そのまま建物疎開をしていたら、こんな風に日記を書いていることはできなかったろう」と記録しています。

8月6日旧制中学生の父は観音の学徒動員先にいました。昭和21年（1946年）8月6日の日記には「あの時自分は三菱重工業の工場の旋盤の所へ、務中君その他工場の江波さんと一緒にいて、話していた。ちょうど自分は正面にあの閃光を見た。友達にあの光を見よと指さしたとき—この瞬間自分は製缶工場のヒューズがとび、或いはスパークして出た光かと思った—爆風が来て自分の帽子は飛び、工場の屋根その他の所の



スレートが飛び落ち、工場の中は埃で暗くなった。自分は無意識のうちに、定盤の辺へ身を伏せた。そして、1分くらい後、また上から何か落ちてくるかも知れぬと思い、急いで外に出る。まだ平常と変わりあの放射能のためか少し明るかった。」と書いています。

先生から帰ってもいいと言われた父は、同級生と3人、自宅の稲荷町（爆心地から1.5km）に向かおうとします。

父がいた埋め立て地の観音からでて西側の己斐に行くまでに大粒の激しい黒い雨にあったようです。雨宿りをしてから己斐に寄り親戚の叔母、叔父と会い無事を喜びあいました、友人と一緒に自宅に向かいました。

街中は崩れた建物などで歩けず川の堤防を歩き横川へ、「横川駅付近は、火の海。道路の真ん中の電車の軌道の上を通りぬけた。電線が垂れ下がり、建物が燃えている、馬が燃え盛る火災のなかでじっと立っていた」風景を忘れられないものと書いています。また、横川付近で、建物疎開に行っていた生徒と会い、ひどいやけどをしており、何も身につけていなかったが何もできなかつたと書き残しています。

父はその日のことをこんな風に書いています

横川駅から線路のうえを歩いて広島駅のほうに向かった。橋の上にはやけどと負傷の人でいっぱいになっていて、「お水をください、お水をください」と言われるが何ももっておらず、無傷でもあり、何か悪いことでもしているような、後ろめたいきがして走り抜けるように橋を渡った。そのわたった橋の下の京橋川には、おばあさんや軍人の死体が浮いている。また歩けば被害者から水を頼まれ実に悲しかった。これこそ本当の地獄だといった気がした。

8月6日には、うちに帰ることはできず、牛田町で同級生と一緒に同級生の親戚の納屋に泊めてもらった。

翌日8月7日稲荷町の家に戻り着いたら家は焼失していた。一緒に帰ってきていた流川の同級生の家も、竹屋町の同級生の家も全焼していて家族の行方も分からない。同級生と別れ、家にいたはずの父の母清子と1歳の下の妹を探しに市内を歩いた。

私の祖母は稲荷町で被爆しており、祖母には当時の話を少しだけ聞いています。その瞬間1歳の叔母をだきかかえていたので、覆いかぶさるようにして守り、赤ん坊の叔母はやけどを負うこともなかった。自分は腕や顔にやけどをおったからケロイドになっている、と言っていました。この時祖母の体にガラス片が入っており、何年もたってから、出てきたときいています。

祖母は広島駅の方にげ、中山小学校に収容されており、父は8月7日に祖母と下の妹を見つけることができました。8月8日には、火災を免れた尾長町の中学の同級生のお宅に泊めてもらい、同級生宅でいただいたごみや布団をもって中山小学校へ行くと祖母のやけどには蛆がわいていたが、やけどに薬を塗るぐらいしかできなかったそうです。

父は、もう一人の妹和江さん（被爆地から1K以内の雑魚場町で建物疎開に学徒動員されていました）をさがして、牛田山・東練兵場などあちこちを歩いたそうです。

8月8日、8月9日も妹をみつけることができず、8月10日になって字品の広島女子専門学校の教室に収容されているのを探しあてたそうです。

その時「廊下で足音が聞こえるたびに、父か母か兄か、だれかが私を探しに来てくれたのかと、首を長くして待っていた」と和江さんが言った。その言葉は忘れることができないと書いています。

8月11日、友人の家で大八車を借りて中山小学校から、祖母と1歳の叔母を乗せ、祖父と父とで和江さんがいる女子専門学校まで運んだそうです。

和江さんは、8月12日に亡くなりました。祖母は、「苦しいとか、つらいとか言わずにきれいな声で歌をうたっていた」「歌を聞いていた周りの人からトマトをいただいた」と話してくれたことがあります。

8月6日には、女学校1・2年生、中学校1・2年生は建物疎開に学徒動員されていて、その多くが亡くなっています。原爆資料館にも、探しに行った家族がやっと見つけたズボンのベルトバックルなど多くの遺品

が収蔵されています。家族とも会えずに亡くなっている人も多いです。家族に会えずに亡くなった多くの被爆者と比べれば少しは幸せだったかもしれないと父も手記の中に書いています。

亡くなった和江さんをトタン板にのせて火葬にしたそうです。骨壺は稲荷町の焼け跡から掘り出したお汁粉の茶碗で代用にした。この時一緒に焼けていたコーヒー茶碗の1個は、ヒバクシャ会館に寄贈しており、展示されています。

父は「和江は当時のままの骨壺で祖父母、父たちと眠っている。私もやがてその墓地に埋葬されることになると思う」と書いています。父の納骨の際に、私もお汁粉茶碗の骨壺がお墓に入っているのをみました。

父は生涯原爆で亡くなった妹のことを忘れたことはなかっただろうと思います。私に被爆した当時のことを語ることはありませんでした。でも、残されている日記には、焼けた家にあつたいろいろなものは、もったいないことをした、今あればどんなにいいだろう、でもそれよりも何よりも妹が亡くなったことが惜しいと書いています。

また、「被爆45周年、ノーモアヒロシマの願いをイタリアの空に響かせるため、ベルディ作曲レクイエムをイタリアベローナで歌いませんか」とラジオから呼びかけられているのを膀胱腫瘍のあと腰痛の悪化でトイレに立つのにも補助のいる状態だった父がきき、原爆で亡くなった妹のためにコーラスに参加することにしたそうです。

音楽学校に通ったこともあった父なので、海外で被爆45周年での鎮魂曲を演奏することで、亡くなった妹への思いを届けられたらと思ったのではないかと想像しています。合唱の練習に通う中で腰痛もよくなり、母と二人でイタリアのアレーナに出かけたまたイタリアの新聞に報道もされました。

今年是被爆75周年になります。子どものころ、75年間草木も生えないと被爆直後には言われていたことを学習しました。学校で原爆のことを聞いていたころには、核兵器をなくせるとの展望を持つことはできていませんでした。

2009年にオバマ大統領が核兵器のない世界を実現すると演説し、2016

年には広島を訪問しています。アメリカがすぐに核兵器禁止条約に参加するとはなっていませんが、核兵器禁止条約もあと6か国の批准で発効されるまで来ています（8月9日現在）。

地雷や毒ガスをなくすことができたように核兵器もなくせると確信しています。

「ノーモアヒロシマ、ノーモアナガサキ、ノーモアヒバクシャ」「ふたたび被爆者をつくらない」と声を上げ被爆者も運動してきています。このスローガンには、自分たちが遭った被爆の実態を伝え二度と核兵器が使われることがない世界をつくらなければならないという意思を感じます。

父の日記にも残されていましたが、「水をください」というやけどをしている人たちに何もできず、走るように通り過ぎたことや、自分だけが生き残っていると生き残ったことへの後ろめたさを被爆者は持っています。それでも被爆の体験を書き残し、核兵器の非人道性を伝えるために、つらい思い出であっても伝えなければならない、と被爆者は考えているのです。それと同様に、「ふたたび」被爆者をつくらないために、私たち自身ができることは何かと考えなければならないと思います。

唯一の戦争被爆国と言いながら、日本政府は核兵器禁止条約を批准しようとはしていません。戦争被爆国というのであれば、黒い雨にあった被爆者を救済し、再び被爆者をつくらないために核兵器禁止条約を今すぐ批准する政府であってほしいと思います。

直接聞いたことのない、被爆の体験について、少しでも伝えていくことで核兵器をなくすための力になればと思っています。